

ルネ・ド・オバルディアの笑い

『人間大砲の女芸人エルザ』または大尻の聖女

森 本 達 夫

はじめに

ルネ・ド・オバルディア (René de Obaldia 1918年ー) は現在フランス本国においては《現代劇の古典的作家》という評価がすでに確立しており、拙論においても度々紹介しているので繰り返しになるが、手短かに彼の経歴を紹介しておく。1969年12月27日付けのル・モンド紙の紹介文に、《戦後にまずシュールレアリスムの詩人として文壇にデビューし、その後小説も発表して一度ならず受賞もしたが、happy few の関心を惹いただけであり、作家としての成功は彼の劇作品によってもたらされた。》とある。¹⁾ 事実、まず1960年に『夢の劇』という副題が後につけられた『ジュヌージ』(Genousie) が国立民衆劇場という大舞台で演じられ²⁾、それ以降矢継ぎ早に発表された劇作品はすべて大成功を収め、多くの国で翻訳上演されて現在にいたっている。1993年パリのシャトレ劇場で行われた第7回モリエール祭ではその年に再演された『クレップス博士とロザリー』(Monsieur Klebs et Rozalie, 1971年初演) が最優秀戯曲賞、そして彼自身も最優秀劇作家賞を受賞している。³⁾

1) 《Portrait de l'artiste par lui-même : René de Obaldia à travers ses *Innocentines*》, dans *Le Monde*, le 27 décembre 1969.

2) 拙論《ルネ・ド・オバルディア作『ジュヌージ』における笑い—前—》(近畿大学教養部研究紀要第25巻1号、1993年7月)、《ルネ・ド・オバルディア作『ジュヌージ』における笑い—後—》(近畿大学教養部研究紀要第25巻2号、1993年12月)、《Le Rire de René de Obaldia dans *Genousie*—supplément—》(近畿大学教養部研究紀要第26巻2号、1994年12月) 参照。

3) *Le Figaro*, le 5 avril 1993 参照。

この作家は《不条理 absurde の劇作家》とみなされがちであるが、彼自身はデビュー当初から繰り返しそれには異議をとなえ、「不条理なものは何も存在しない。神秘的でいまだ理解されていないものがあるだけだ。この神秘、闇の奥にあるものを照らしたそうとするのが作家の務めだ」と一貫して主張している。⁴⁾

事実《不条理》というレッテルだけでその内容を安易に語るができないのがこの作家の作品である。批評家たちは新作が発表される度に、現代的なセンス、文学、歴史、宗教と他方面にわたる造詣、深い思想性、鋭い問題意識、またく言葉の魔術師、錬金術師>といった称賛をうける詩人としての資質、また新鮮な笑いを生み出す喜劇性等にあらためて驚嘆し、繰り返し称賛するにとどまっている。

批評家たちを困惑させ続けているこの《難解な作家》が1993年ついに『自伝らしきもの』(*Exobiographie* というタイトルである。《外 ex》と《伝記 biographie》をつないだオバルディアの造語であり、とりあえずこのように訳しておく。)⁵⁾を発表し、同年のプルースト賞を受賞した。⁶⁾これがこれまでに発表された作品解読の鍵になるのではないかと期待されたが、これも見事に裏切られた。ある批評家が一文を寄せ、「語り手は自分の回想から出発しながら、さらに人間存在の不条理性 (incongruité) にたいする鋭い視線を我々に開示してゆく。純粋な夢の記述のなかにも奇妙な現実感がある。このなかでもオバルディア独特のユーモアのセンスがまたしても軽快な残酷さをともなって遺憾なく発揮されている」と語っている。⁷⁾

『自伝らしきもの』と銘打たれたこの作品のなかには、子供時代の出来事、体験などを作者が自分の歴史として《年代記》的に記述している章も勿論数多く存在する。そういった章に書かれていることであるが、彼は幼いときにサーカ

4) 《Portrait de l'artiste par lui-même : René de Obaldia à travers ses *Innocentines*》, dans *Le Monde*, le 27 décembre 1969.

5) René de Obaldia, *Exobiographie*, Ed. Grasset, 1993.

6) 《Le prix Proust à René de Obaldia》, dans *Le Figaro*, le 8 juillet 1993.

7) *Exobiographie* の裏表紙に掲載された批評文。

スに連れていってもらっている。そしてこの《自分が実際に経験した事実》をもとにして連続して4つの章を作成している。『世界最強の男』、『夜の祈り』、『転職』そして『エルザー人間大砲の女』と題された章である。この4編はその前後のテキストとは傾向を異にし、これだけで独立した《一つのまとまった全体》と一応なっており、『サーカスの思い出』といったタイトルでくることができそうなものである。(以下『サーカスの思い出』と呼ぶことにする。)

幼いとき、大人にサーカスに連れていってもらったという経験は誰も一度や二度はあることである。思い出せば、満員のテント内で笑いどよめく人達、目の前で次々とくりひろげられた華やかでまた驚異的な数々の出し物、それらを夢中になって見ていた自分などが、何故か一種の切なさをもたないながら脳裏に蘇ってくる。こういった体験は我々皆に共通するものであり、これ自体なんら特異なものではないだろう。

しかし、《自伝—自分の過去の体験を思い出してそれを今語ること》と《過去の出来事の客観的な報道》とは必ずしも一致するものでないことはいうまでもない。フィリップ・ルジュンヌは、フランスの著名な自伝の読解を試み、《語られる事柄と、それを語る言葉の間の次元の相違》に着目して論を進めているが⁸⁾、オバルディアのこの《サーカスの思い出》をめぐる4編も、自伝という文学ジャンルの特異性をしめす興味深いケースになっているようである。すなわち、《語られる事柄》(証言される過去の体験—少年オバルディアがサーカスで見た出し物)と《それを語る言葉》(その過去の事実に目をそそいでいる現在のオバルディアの内面)が錯綜し、干渉しあい、やがて独特の世界がこの4編のなかで作りあげられているのである。

これらはいずれも短編であるが(自伝全体は67章390ページ、そのなかで『サーカスの思い出』は4章全部で19ページ)、この『自伝』全体に対して批評家の指摘した、《人間存在の不条理性に対する鋭い視線》、《現実と夢の奇妙なまじりあい》そして《オバルディア独特のユーモア》を読みとく手掛かりの一つ

8) フィリップ・ルジュンヌ著『フランスの自伝』(小倉孝誠訳) 1995年法政大学出版局発行参照。

になりそうである。以下この《語られる事柄と、それを語る言葉の間の次元の相違》というディテイルに注目しながら『サーカスの思い出を語る4編』のテキストの分析を試みてみよう。

(以下〔 〕内はテキストの試訳である。オリジナルの仏文のテキストの掲載は割愛する。)

I. 『世界最強の男』 (*L'homme le plus fort du monde*)⁹⁾

このような書き出しでこの章は始まる。

〔私の子供時代の一番の喜びの一つはアック夫人に連れられてアミアンの市立サーカスにゆくことだった。これはジュール・ヴェルヌによって建設されたものだった。1888年、ジュールはすでにアミアンの科学文学芸術学士院の会員に選出されていたが、市議会の議員でもあった。この著名な作家はピカルディー地方に《ヨーロッパで一番のサーカス》をつくる事を企画し、その結果町の真ん中に2700人を収容する壮麗な建物ができた。それは夢と豪奢さを内に閉じ込めた巨大な円形ドームだった。豹や熊、象、道化師、空中ブランコ乗り、手品師、小人たちの一群、人間大砲の女の寝床などをかかえた一大寺院であった。〕

ある木曜日の午後（わたしは7歳になろうとしていた）わたしはそこでリグロ、シャルル・リグロという世界最強の男を見た。〕

これは自伝の常套手段であろう。挿入された「わたしは7歳になろうとしていた」という事柄であるが、見物にでかけた少年がその時意識していたはずがない。また、自分がすこし前に目にしたものを話言葉で綴る、いわば子供の狭い視点と文体からは完全に離れている。後年大人になったオバルディアがあらたにアミアン市の資料などに目を通し、歴史家として、いわば《神の視点から》再構成した文章であろう。

しかし、すぐさまトーンが変わる。火のついた輪をくぐる王者のような風格をもったトラや、空中を飛ぶブランコ乗り、肌も露な美女が切り刻まれるがす

9) *L'homme le plus fort du monde*, dans *Exobiographie*, pp. 143-151.

ぐにまたもとの姿でにこやかに現れたり、といった馴染みの出し物が興奮した少年の口調で、話すのがもどかしい、けれども言葉が口をついて出てくるといった調子で、熱っぽく記述されている。しかし牧師の恰好をしたチンパンジーが難しい算数の計算の答えをたちどころに黒板の上にチョークで書く出し物のところでは、〔そのチンパンジーがなぞった数字には巧妙な仕掛けがなされていたということを勿論当時の私は知らなかった。〕とそれに水をさすような一言も挿入されている。

ここにも〈ウラを知ってしまっている大人、冷徹な歴史家としての現在の作家と、素朴に興奮した当時の自分の同居〉がよく示されている。

少年オバルディアは《世界最強の男》というとてつもないタイトルをいかにしてリグロが手にしたのか自問している。

〔いつから彼は世界最強の男になったのだろうか？小さい時からすでにそうだったのだろうか？ゆりかごのなかで彼は宙返りの練習をしていたのだろうか？ガラガラを全部呑み込んだのだろうか？妹を絞め殺したのだろうか？狼の乳を飲んで大きくなったのだろうか？〕

子供っぽい《直接話法》で語られてはいるが、無双の怪力の英雄ヘラクレスがまだほんの赤ん坊の時に蛇を絞め殺したとか、ローマ建国の英雄が狼に育てられたといった神話を下敷きにしたものであり、ここでも少年オバルディアの口調と現在のオバルディアの知識が溶け合っている文章になっている。

最後に一番の出し物《世界最強の男》が登場すると、彼が本当にいかに力持ちであったか、〔腕を組んだ上体が鎖で縛られるが、彼は息を吸い込んで胸をふくらまし、その鎖を断ち切ってしまう。同じように彼が腕を組む、その双方に綱がゆわえられる、その綱を左右に最初は大の大人が6人ずつ、次には5馬力の車が引っ張るが、彼は最後までもちこたえる...〕といった光景が、（彼は洞窟の中に、それとも城に住んでいるのだろうか、犀でも食べているのだろうか、奥さんも3人ぐらいいるのだろうか、あの英雄ナポレオンも一捻りだろう... といった少年オバルディアの抱いた疑問、感嘆の念とともに）スポーツの実況中継をする熱狂したアナウンサーのような口調で伝えられている。

作家はしかし、〔遠くないところにカップルがいてまわりの興奮をよいことに接吻をかわしていた。彼女の目は宙をただよい、彼は彼女のデコルテの中に手をいれていた。中にバッタでもいるのだろうか?〕を挿入し、《世界の驚異》を目にして興奮し、有頂天になっていた当時の素朴な自分の《視界の狭さ、経験の浅さ》をからかい続けている。

II. 『夜の祈り』 (*Prière du soir*)¹⁰⁾

夜床につきながら、「サーカスで見たリグロのように自分も世界で最強の男になりたい」と神に祈っていると自分が実際にどんどん強くなるように感じていったが、やがて天使が舞い降りてきて力をぬかれ、寝入ってしまった、という1ページの短い章である。

〔夜わたしはよくベッドで毛布を頭から被り（そうしていると誰からも見えなくなると思っていた）主に祈りを捧げた。「全能の主、天と地とアック夫人のネコの創造者よ、大きくなったら、リグロのように世界で一番強い男にしてください...（中略）私は胸の上で腕を組み拳を握りしめた。そして超人的な力がみなぎってくるのを感じた。この世界の誰も、あのリグロでさえそれを解くことはもう出来なかった。象が腹の上に座っていたが、まるでトンボみたいだった。私は大きくなってゆき、足がベッドからはみだしていった。わたしはどんどん大きくなって行って無敵になった。〕

現実には、眠気がさしてきて意識が朦朧となり、すでに半分夢をみていたのだろう。しかし、ただただ少年オバルディアの感覚から言葉が連ねられてゆく。

〔台所の音がうるさくここまで聞こえてくるが、まるで雪に埋もれた遠くの国の物音みたいだった。オノリーヌが食器を洗って戸棚にしまっているのだ。時計のチクタクいう音が別の時間の時をきざんでいた。〕

やがて天使が聞こえないくらいに羽を細かくふるわせながらそっと天から下りてきて私の上にかがみこんだ。優しく、優しく、組まれていた戦士の腕をいとも簡単にほどいて体にそわせ、その緊張をほぐしてゆく。天使は星を消して、

10) *Prière du soir*, dans *Exobiographie*, p. 152.

私の唇に指でそって触れてから帰っていった。暖かくて、自分はついに寝込んでしまった、親指をなめながら...] というメルヘンチックな話である。

天使と思ったものは実は自分を育てていた祖母のオノリーヌだったのであろう。しかし、この事実を暴露することなく、作家は当時の自分と最後まで溶け合っている。作家の役割は、《あくまでも詩的な文体を行使するだけ》であり、眠りにつこうとしている少年の思い、その意識、感性、夢を書きつづけてゆく。守護天使に見守られながら眠ったというこの少年の意識と現実とのずれは、《少年時代という至福の時》を描く見事な《装置》として機能している。

Ⅲ. 『転職』(Recyclage)¹¹⁾

《世界最強の男》の後日談である。〔時間という試練をうけて〕世界一の力持ちだった男も歳をとってしまおうだろう。すると若いときに強かっただけに普通の人間よりもっと惨めになっているのではないかとオバルディアは後年ずっと気に病んでいたが、偶然その男のその後の消息をつかんだという話である。

〔思いがけない経緯で答えを得ることができた。時評欄担当者であったアレクサンドルの息子のピエール・ヴィアラットのお蔭である。彼は父の遺品として父が大事に収集していた1930年代の新聞の切り抜きを送ってきた。信じられないことだが、あのリグロが一つのコラムを担当していたのだ。それもなんと恋愛の悩みの相談者になっていたのである。彼は見事な転職をなしとげていたのだ...〕

まさに実生活で体験した《小説よりも奇な事実》を書き綴っている。《世界最強の男》リグロはその裏で、恋愛問題に精通し、悩みの相談にのって見事な解答を書いて与える頭脳と文才をも併せ持っていたのだ。少年時代にみた《この世の驚異》が完全に消え去ってしまったわけではないとホッとしたというオチであろう。オバルディアはこの章の最後を「かくまでにアラーの神は真に偉大なり」というアレクサンドルの言葉で結んでいる。

11) *Recyclage*, dans *Exobiographie*, pp. 153-154.

IV. 『エルザ—人間大砲の女』 (*Elsa, la femme-canon*)¹²⁾

最後の章は《人間大砲》のスターの話である。《大砲のなかに人間がもぐり込む。点火されると、砲弾のかわりに筒口から飛び出し、向こうに張られていたネットの上に無事着地する》というこれもどこかで見たようなサーカスの出し物のことである。

〔エルザは大砲のなかに住んでいる。彼女はそこにベッドをしつらえる。(新しいワラがいつもある。毎晩小人のピニャルがとりかえてくれるのである。)外に住むよりずっと便利だった。嫌な天気の時でも遠く離れた仕事場まで通わなくてはならないということは彼女にはなかった。交通渋滞に悩まされることもなかった。ベッドもあれば台所もある。メタンガスの缶を使った小さなコンロのおかげで温かいものを食べることができた。(管理の人間も目をつぶっていた。) ローソク一本で中は十分明るかった。(中略)

彼女は孤児院で育ったのだった。父の顔も母の顔も知らず…。病弱であり、すくすく育つというわけにはいかなかった。発育はもっぱらお尻の部分でおこなわれていった...] という記述でこの章ははじまる。

〔6歳の時から彼女は下働きをさせられた。(中略) 彼女が他の誰も代わりのできない、そして彼女自身、たとえ一国と交換すると言われても断つだろうこの仕事、《人間大砲》のポストに将来つくことになる誰が予想しえたであろうか!〕

ここでは作家の少年時代は登場しない。お尻の大きな一人の孤児の娘エルザが主人公であり、彼女の物語が三人称で語られてゆく。しかし『世界最強の男』の章に《人間大砲の女の寝床》という言葉があったので、これもあのサーカスにちなんだ話であろうと読者は読み進むことになる。10才の頃彼女は今いるサーカスに引き取られたが、なんの芸も身につかず、ずっと下積みの生活であった。しかしある日、どんどん大きくなっていったエルザのお尻が団長の目にとまり、これなら大砲から打ち出される時のショックにも耐えられると判断さ

12) *Elsa, la femme-canon*, dans *Exobiographie*, pp. 155–161.

れて、エルザはローザ嬢の跡を継ぎ、命懸けだが、それゆえに一番の呼び物の花形スターに昇格するわけである。なんの取り柄もなかった娘であったが、彼女がもっていた通常はマイナスになる部分がプラスに転化し、思いがけない出世をしたというサクセスストーリーである。

一見したところ、現実のディテイルにこだわるリアリスティックな内容と文体であり、前の三つの章を読み進んできた読者は、オバルディアがなんらかの方法でサーカスの舞台裏にもぐりこんで取材をし、その記録をもとに実録小説に仕上げたのだろうと思ひ込むわけである。

しかし、この《お尻が大きいだけで出世した》娘の送る毎日の地味な生活のリアルな描写、肉体や物理的な動きに属する事柄、また彼女をとりまく俗っぽい様々な人間模様の記述のなかに、それらとは通常相いれない《次元のちがった言葉》、思想や宗教の分野で口にされる観念や言辞がしだいにそえられてゆき、この〈お尻の大きな女—エルザ〉の話がそのまま一つの聖女物語のようなもの〉に変貌してゆく。

〔今彼女は何才なのだろうか？24才？28才？彼女にもよくわからない。知っていることといえば、自分がずっといる大砲の中では、絶え間なくうごきまわり、忙しくしている同胞よりもゆっくり自分が歳をとっていつていうことだった。忙しく移動や活動をしていた者も、死に際には、それらが結局は別に大したことにはなっていないことが分かるだろう...〕

彼女は〈移動や活動ゆえに発生してくるこの世の不幸〉から免れている。団長が毎日やってきてエルザに大砲の口からお尻を突き出させ、まるで子馬の尻を撫でるようにそれを撫でながら調子はどうかと言葉をかける。彼にとってはこれが《自分に幸せをもたらす日課》である。彼女はお尻の手入れを欠かさない、それが唯一の道具であり、生活の糧をかせぐ手段であるから。小人のピニャルは彼女に夢中になっているが、彼女のほうは面倒なことになるのが嫌で相手にしない...

〔彼女はこの無垢で純な生活 (cette vie chaste) が気にいっていた。鋼鉄のファルスの中に大事に匿われたまるで尼僧のような毎日が... 彼女は居るべ

きところに居た。彼女は自由だった。]

[彼女は綺麗というわけではなかった。(オーギュスタンの妻のオーギュスティヌと比べて。)彼女の顔は両生類の顔のほうに傾いていた。しかし(これは天の予期せぬ贈り物であったが)豊かで繊細な金色の髪が彼女を優美な感じにさせ、彼女が《女》であることを証拠だてていた。]

《天の予期せぬ贈り物の美しい髪の手》、この表現はヒロインに幾ばくかの魅力を加味するちょっとしたリップ・サービスのようなものであろうが、同時に、それだけにとどまらず、まるで守護天使の代行者のように彼女を見守っている作家の眼差しをも一瞬のうちにひらめかせるものである。

[彼女の最高の喜び、それは発射の瞬間である。その瞬間彼女は臨終の際の終油の秘蹟を待つカトリック教徒のいまわの際の病人のように思いに浸った。]

作家は〔やがて夜その孤独のなかでエルザ(聖女エルザ!)は幻覚をさずけられるに至った。〕と書き、彼女が遠く離れたところで起きた事件や過去や未来の出来事を小人のピニャルに語るようになったと続けてゆく。〔時間、時間の観念自体が記憶を持たない砂漠の中でぼやけて消えてゆく。過去、現在、未来がそれらのカードをゴチャゴチャにまぜてゆく。〕

また彼女は前任者ローザの幽霊(彼女は演技の真っ最中、空中を飛びながら心臓発作をおこして亡くなった)の訪問をうけるようになる。幽霊は「こんな生活なんて、女のするものではない」となげくが、エルザは「でも生活って何?」とうけながすだけである。

彼女はしばらく前から世界が大きな不幸に見舞われることを予感している。戦争が勃発するのだろうか?しかし、敵陣に砲弾のかわりに美女たちを撃ち込んだら一大パーティーになって戦いもたちどころに収まるだろうなどと思いをめぐらせたりする。

しかし、結局彼女は自分の本質、自分のお尻にもどる。アルコールが少し入ると彼女は言いようのない幸福感につつまれる。《肉体に属するものが精神的なものに昇華して終わる》という通常期待されるベクトルに抗い、全てを大尻の女(callipyge)に収斂させてこの短編の最後を結んでいる。

〔彼女はいるだけで幸せに感じた。自分の死刑執行人に守られて、その悪のままに奥底にいて。(中略) 目下のところ、小人は恋のため息をもらしており、団長は毎日お尻を崇拜して手で触りにやってくる。彼女は次第に自分が女／神、人間大砲の女、すなわち次第に大尻の女であることを感じてゆく。〕

まるで実話のように書きはじめられた華やかなサーカスの舞台裏の俗な世界、そこに生息する一人の娘の肉体と物理的な動きを語る一編であるが、同時にオバルディアはこの世俗の場で、あの《聖性は卑劣さに似ている》¹³⁾ という西洋の思想の命題の一つを原理にして、《神に祝福された一人の幸福な女》をエルザに重ね合わせて創造することに挑んだのであろう。実際思い悩むこともためらうこともエルザにはない。騎士のように鎧をまといはせず、聖者のように裸である。その一日は永遠に（あくまでも目下のところではあるが）変わることのない一連の儀式と化し、大砲の発射とともに日毎に死と再生を（時にはオシッコをもらしながら）繰り返している。ピニャルに想われており、団長には祝福を与えている。

過去の事実の記録と思わせる入口を通して読者はこの短編の中に入るが、実はそこは言葉の魔術師オバルディアが建設した、（現実にはどこにも存在しない）言葉がその唯一の材料であり、それでのみ組織され成立している虚構のサーカスの世界だったのであり、この手品師はそこで大人の読者にあらたな驚異的な出し物、《俗における一つの聖性の顕現》を提供してみせたのであろう。

結論

オバルディアを古典的な意味では《カトリック作家》とみなすことは不可能であろう。この現代作家はすでに遠くまでさまよい出ている。1998年にパリでこの作家と面談する機会があったが、『エルザ...』の事が話題になった時に、〈大尻に対する男（＝女の敵）の勝手な思いこみ〉に憤慨する女性の一

13) 『シモーヌ・ヴェイユ著作集 3—重力と恩寵—』（渡辺義愛訳）春秋社1998年発行、pp. 30—31参照。

読者の言葉を伝えると、「とにもかくにも私は女性の肉体のフォルムには絶大な尊敬の念を抱いている」と問題をすりかえながら、その目をいたずらっぽく輝かせていたのが印象的だった。

母親はフランス人だが、父親はパナマ人の外交官、すなわちスペイン系であり、自分のユーモアはスペイン文学の系統をひいているとオバルディア自身が語っているが、フランスの片田舎で大きくなり、教会付属の学校に通っていた¹⁴⁾この作家の内面、その作品にはキリスト教の文化、その思想と言葉が深く刻印されている。『世界最強の男』、そして『夜の祈り』では、自伝と銘打たれた文学作品の多くと同様に、子供時代にサーカスで目にした驚異的な出し物、そして興奮のさめやらぬまま夜床についた当時の自分の夢を、《楽園から追放されて久しい》現在の作家が様々なタッチで描いているが、少年オバルディアにとっては舞台の上での芸人、そしてその芸はまさに《神聖な奇跡のようなもの》だったのだろう。

『転職』は〈世界最強の男〉の後日談である。後年大人になって世俗の世界を生き、〔時間が全てのものを試練にかけ、変えてしまう〕ことを知ってしまったオバルディアであったが、かつて胸をときめかした英雄が歳をとってもそんなに落ちぶれたものになってはおらず、見事な転職をはたしていたことを知って心がなごんだというエピソードであり、《奇跡》が実人生のなかで完全に失われてしまっていたわけではなく、その残照のようなものを偶然目にしたという報告である。

最後の『エルザ—人間大砲の女』は一人の女芸人の私生活の方を実録風に描いたものである。〈世界最強の男〉をめぐる前の三つの章とは逆であり、舞台の裏側、華やかさとは無縁の俗で平凡な世界の話である。しかし、そこが《新たな驚異》の生まれる場だったのである。ここでオバルディアは言葉の魔術師と称賛されるその腕をふるい、その手品を使って、テキストの表現を真似ると、《聖と俗、精神と肉体のカードをませあわせながら》、大尻の女エルザのうちに、神に祝福された聖女にも比されうる一人の女の姿を出現させたといえよう。

14) *Le-Petit-Jésus-s'en-va-t-à-l'école*, dans *Exobiographie*, pp. 122-124 参照。

実際に目に映る現代社会の残虐さ、その無意味さと不条理性にうちのめされながらも¹⁵⁾、この作家自身にも時折至福の時が訪れる。

〔真夜中起きてみると庭の上に何千もの星が集まっていた。何千もの踊り子のようにまたたき、月が女主人のように彼女たちをとりしきっていた。喜びがわたしのうちに満ち溢れ、わたしは聖なる配剤をはっきりと知覚した。わたしが沈黙を守り、自分が自身の真空のうちに住む (habiter mon vide) のを受け容れている限り、私自身もこの配剤、この祭典にあずかっていた...〕¹⁶⁾

(筆者は関西学院大学商学部教授)

書誌： この論の執筆にあたって直接使用したテキストだけにとどめる。

René de Obaldia, *Exobiographie*, Ed. Grasset, 1993. (この作品は1995年に Le Livre de poche 版で再版されている。)

15) *Nulla dies sine linea*, dans *Exobiographie*, pp. 284–285 参照。

16) *Nulla dies*, dans *Exobiographie*, p. 290. 参照。